

コロサイ人への手紙4章「同労者たちと教会」

1A たゆみない祈り 2-6

1B みことばのための門 2-4

2B 外部に対する言動 5-6

2A 挨拶にある仲間たち 7-18

1B 忠実な、愛する兄弟 7-9

2B 割礼のある同労者 10-11

3B アジアからの同労者 12-14

4B ライディキアへの手紙 15-17

5B 手書きの挨拶 18

本文

コロサイ人への手紙 4 章を開いてください。前回、4 章 1 節までを学びましたので、2 節から読んでいきます。

1A たゆみない祈り 2-6

1B みことばのための門 2-4

² たゆみなく祈りなさい。感謝をもって祈りつつ、目を覚ましていなさい。

私たちは、キリストの愛を受けた者たちです。キリストが私たちのために、愛し尽くしてくださったと同じように、私たちが祈りをもって労していきます。その中で、私たちの間に、愛しておられるキリストが現れてくださいます。少し祈った、ということではなく、たゆみなく祈ることによって、キリストの愛が現れます。午前礼拝でじっくり学んだので、ぜひ、そちらをお聞きください。

「感謝をもって」とパウロが言っていますね。ピリピ人への手紙には、主にあって喜ぶことを繰り返して話していましたが、コロサイ人への手紙には、感謝することが繰り返し出てきます。1 章 3 節で、コロサイの人たちのことで神に感謝して祈っているということ。2 章 7 節には、キリストのうちに根ざして、あふれるばかりに感謝しなさい、とあります。そして 3 章 15 節には「感謝の心を持つ人になりなさい。」と勧めていて、感謝をもって神に歌うこと、何をするにも神に感謝することを続けて書いています。感謝を祈りの中で言い表すことによって、主が今、何をしてくださっているのかが見ることができ、目を覚ましていることができますね。

³ 同時に、私たちのためにも祈ってください。神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように祈ってください。この奥義のために、私は牢につながれています。

パウロは、彼らのためにいつも神に感謝して祈っていましたが、今度は、パウロはためらうことなく、私たちのためにも祈ってくださいとお願いしています。主のための労している人は、祈りが必要であることをここで教えています。エペソ書でも、「福音の奥義を大胆に知らせることができるように、祈ってください。」と言いました(6:19)。私たちの教会でも、福音を語る人たちのために祈っていますね。私のために、祈り会で祈っていただいています。そして、福音の働きをしている時は、みなさんもぜひ、教会の仲間に要請してください。

その祈りの一つは、「神がみことばのために門を開」いてくださることです。福音のことばを語ることができるように、その機会を下さるように祈ります。そして、「キリストの奥義」が語れるように、ということです。パウロは、1章27節で、「この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。」と言っていました。私たちは、御子が万物の長子であられ、御子にあって万物が造られ、万物が成り立っていることをパウロがから教わりました。そして、御子こそが復活の第一人者となられ、この方を信じる者に復活を与え、万物が復活、新たにされるのです。そして、この御子が肉体を取られたので、神が私たちと和解してくださるということを学びました。このキリストが、私たちの内におられます。こんなことは、啓示によられなければ、分かりません。御霊によられなければ、分かりません。ですから、このことを語れるように祈ってくださいとお願いしています。

そして、「この奥義のために、私は牢につながれています。」と言っていますね。パウロが、エルサレムで同胞のユダヤ人たちに、福音を語ったことによって暴動が起こり、それで捕らえられて、今、ローマの牢にいます。牢といっても、自費で借りた家に住んでいますので、ある程度の自由が与えられています。その自由を使って、神の国を宣べ伝えていました。パウロは、牢につながれているということは、それが奥義のためである、キリストの福音のゆえであることを、はっきりと知っていました。はっきりと知っていたので、彼は主に召されていること、福音宣教を牢の中においてさえ、行っていたのです。そして、教会に対して、このように手紙を書いています。その他、エペソ人への手紙、ピリピ人への手紙、そしてピレモンへの手紙を書いています。牢というものが、彼にとっては、福音の働きの現場だったのです。

みなさんも、自分の置かれているところが、神のみこころを行う現場なのだということを知るとよいでしょう。私たちの友人に、幼い息子さんを心筋症で亡くした人がいます。日本にもいた宣教師家族です。娘さんも心筋症でしたが、心臓移植手術で助かりました。お父さんご本人も心筋症の症状が現れました。福音を語るのに、これでは妨げになるでしょうか？いいえ、心筋症で苦しむ多くの日本人の人たちがいます。その人たちに、立派な証しをしています。パウロは、第二テモテで、犯罪者のようにつながれているが、「神のことばはつながれていません。」と言っています(2:9)。

⁴また、私がこの奥義を、語るべき語り方で明らかに示すことができるように、祈ってください。

パウロは、ユダヤ人にはユダヤ人のようになり、ギリシア人にはギリシア人のようになったということ、第一コリントで話しました。それぞれの人に、この奥義を語る語り方が変わります。福音は同じなのですが、語り方が変わります。そのために祈ってください、とお願いしています。私たちのバイブル・カフェがまさに、そうですね。本当に、いろいろな方がいらっしやいます。その時に、どのように語ればよいか？は、祈りが必要になります。みなさんも、ぜひ祈ってください。

2B 外部に対する言動 5-6

そして、パウロは次に、外部の人たちに対するふるまいや言葉について勧めています。今、福音を語るために祈ってほしいと願いましたが、教会の外部の人たちには、私たちは知恵が要ります。

⁵外部の人たちに対しては、機会を十分に活かし、知恵をもって行動しなさい。

外部の人たちに対して、私たちがしなければいけないことは「機会を十分に活かす」ことです。いろいろな機会を活かして、福音が語れるようにする。また、キリスト者としての証しが立てられるようにします。そして、一見、自分たちにとって妨げになるような状況があっても、それが実は良い機会になることもあります。直接的に福音が語るができないかもしれない。それならば、行いによって、いかにキリストに目を向けてもらえるかを、知恵を神からいただくのです。

⁶あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味の効いたものであるようにしなさい。そうすれば、一人ひとりにどのように答えたらよいか分かります。

知恵を働かせて、外部の人々に答える時に、どう答えればよいかは、二つの心構えがあれば大丈夫です。それは、親切であること。そして、塩味の効いたものであること、であります。いつも親切、という姿勢を持っていることですね。けれども、その親切の中に、塩味が効いています。人々に、心の渇きを呼び起こさせます。自分の今のやり方では間違っているということを、直接、言わなくとも自ずと気づくような言葉が、塩味の効いた言葉です。世の中の人の言葉を、そのまま受け入れてしまっていることはありませんか？付き合う時に、私たちが影響を受けるのではなく、キリストにあって影響を与える方にならないといけません。親切であることと、塩味の効いたものであるようにすることを心がけていれば、どう答えたらよいか分かるのです。

2A 挨拶にある仲間たち 7-18

ここまでが勧めでした。パウロは、他の手紙と同じように、いろいろな同労者からの挨拶を書いています。名前が羅列しているだけだと思ったら、大間違いです。これまでの手紙の内容は、血肉をもった人々がいてこそその手紙です。具体的な人々が出てくることによって、私たちは、パウロの手紙が、概念的な言葉の羅列ではなく、息づかいも聞こえてきそうな、人々に語りかける言葉であることに気づくのです。

そして、パウロが「同労者」という言葉を繰り返して使います。福音のために労している者たちにある仲間意識を見ることができます。私たちは、奉仕の働きにそれぞれが召されています。主に仕える働きに召されています。そして、労しているからこそ与えられる兄弟愛や様々な人間模様があるのです。みなさんも、その恵みの中に入って来ることを願い、祈ります。

1B 忠実な、愛する兄弟 7-9

⁷ 私の様子はすべて、愛する兄弟、忠実な奉仕者、主にある同労のしもべであるティキコが、あなたがたに知らせます。⁸ ティキコをあなたがたのもとに遣わすのは、ほかでもなく、あなたがたが私たちの様子を知って、心に励ましを受けるためです。

初めに、ティキコのことを紹介します。彼は、使徒の働きで、第三次宣教旅行をパウロが終え、エルサレムに向かう一行の中に、ティキコが出てきます。「使 20:4 彼に同行していたのは、ピロの子であるベレア人ソパテロ、テサロニケ人のアリストタルコとセクンド、デルベ人のガイオ、テモテ、アジア人のティキコとトロフィモであった。」彼らは、主に異邦人の教会で募った献金を、エルサレムの兄弟たちに渡す働きも担っていました。ここには、ベレアやテサロニケなどマケドニア人もいましたが、アナトリア、トルコの人たちもいます。テモテなどデルベの人、そしてティキコはアジア人でした。エペソなどがアジア地方です。つまり、ティキコをパウロが、ローマからコロサイに遣わすというのは、彼の出身地のほうに遣わすことになります。

エペソ人への手紙の挨拶にも、ティキコが出てきます。ですから、ティキコは、エペソ人への手紙を携えてエペソに行きます。内陸に 200 キロぐらい入るとコロサイの町があります。エペソに行ってから、次にコロサイに行って、この手紙を渡すのです。彼は、テモテへの第二の手紙にも、テトスへの手紙にも出てきますが、やはり同じように、手紙を託したり、また遣わす時に出てくる人です。今回、エペソとコロサイに遣わすことについては、単に手紙を渡すだけでなく、パウロたちの様子を伝えるためであります。

そのような中で、パウロがティキコについて語るのは、初めに、「愛する兄弟」です。共に、神によって生まれたところの兄弟です。何か、仕事でつながっている関係ではなく、家族のような関係があります。次に、「忠実な奉仕者」であります。奉仕において第一に挙げられる資格は、忠実さです。イエス様は、忠実であることをタラントの喩えで語られました。忠実というのは、いつも、そこにいることを示します。語っていることは正しくても、行っていることが違っていたら忠実ではありません。言葉数が少なくとも、行いがその人が語ることを真実であることを物語っています。ティキコはパウロに同伴していたので、パウロが手紙を書いたり、どこかに人を送りたいと思っている時に、彼はいつもそこにいました。福音の働きが広がるには、こうした忠実な奉仕者がどれだけいるか？に頼っているのです。そして、「主にある同労のしもべ」であります。しもべというのは、主にすべてを明け渡しています。自分の権利は捨てています。そのしもべの中には、同じ労苦があります。その

労苦を共有しているからこそある、絆、結びつきがあります。福音にある労苦がなければ、その付き合いは、残念ながら希薄なものとなるでしょう。

そしてティキコを遣わすのは、「心に励ましを受けるため」ということです。コロサイの人たちは、パウロたちのことを聞いて励ましを受ける必要がありました。私たちは、それぞれを必要としています。それぞれのことを知り、互いのために祈っていなければ、私たちは励ましを受けられません。主にあって互いのことを知り、励まされることによって生かされていると言ってもよいでしょう。

⁹ また彼は、あなたがたの仲間の一人で、忠実な、愛する兄弟オネシモと一緒にいきます。この二人がこちらの様子をすべて知らせます。

パウロが、もう一人遣わすのは、「あなたがたの仲間の一人」と言っています、オネシモです。オネシモについては、神の麗しい贖いの証しがあります。ピレモンへの手紙に、オネシモが出てきます。ピレモンが主人で、オネシモは奴隷でした。オネシモはピレモンから逃亡していたのです。当時のローマ社会で、奴隷が逃亡して捕まったら、主人のところに送り返されて、主人に殺されます。しかし、オネシモはローマで獄中にいるパウロに会ったのです。そしてイエス様を信じました。そして、パウロは、オネシモによってピレモンが被った損害を肩代わりすると申し出ています。キリストが私たちの罪のために身代わりになって対価を支払われたのと、同じようにです。このオネシモが、ティキコと共にコロサイに行きます。

彼もまた、「忠実な、愛する兄弟」ということです。すばらしいですね、ピレモンにとっては不忠実しもべでした。しかし今、彼をパウロは、忠実であるとみなしています。主がそのようにみなしてくださっているんですね。恵みによって、忠実なのです。

2B 割礼のある同労者 10-11

¹⁰ 私とともに囚人となっているアリストアルコと、バルナバのいとこであるマルコが、あなたがたによくと言っています。このマルコについては、もし彼があなたがたのところに行ったら迎え入れるように、という指示をあなたがたはすでに受けています。

アリストアルコ、マルコ、そして次に出てくる、ユストと呼ばれるイエス、この三人はみなユダヤ人です。アリストアルコについては、パウロがエペソにいる時に大騒動が起こりましたね。劇場に人々がなだれ込んできました。そこに、「使徒 19:29 パウロの同行者である、マケドニア人ガイオとアリストアルコを捕え、一段となって劇場になだれ込んだ。」とあります。そして、ティキコと同じように、パウロのエルサレムへの旅の一行の中にいます。そして今、彼はパウロと共に囚人になっているようです。パウロがエルサレムで暴動に巻き込まれた時に、アリストアルコも捕らえられたのでしょうか？ユダヤ人なのに異邦人への宣教をパウロと共にやっているのです、彼もユダヤ人からの告発

で牢に入れられているのかもしれませんが。

そして次の人物も興味深いですね、「マルコ」です。マルコによる福音書のマルコですね。彼は、まだその時は少年であったと思われませんが、ペテロの言っていることをマルコが書いたと言われていいます。そのマルコのいとこが、バルナバであります。そこで思い出すのは、バルナバとパウロの確執です。第二次宣教旅行の前に、バルナバがマルコを連れて行くと言った時に、パウロは、マルコがパンフィリアで一行から離れて同行しなかったので、連れて行かないほうが良いと考えました。それでバルナバと激しい議論になって、お互いに別行動をとるようになりました。

同労者たちの間で、このような別行動をとるといふことなことは、残念ながらしばしば起こります。カルバリーチャペルの中でも起こりました。かつて、聖霊の賜物で、奇跡やしるしを求める人々がカルバリーの中で出て来て、牧者チャックは、別の道をそれぞれ歩もうということ、その人たちはヴィンヤードという新たな名を付けて教会を始めました。今も、ヴィンヤードという教会の群れがあります。元々はカルバリーチャペルだったのです。けれども、今、働きの違いこそすれ、互いに尊重して、受け入れ合っています。

しかし、パウロの場合、マルコとの和解は早く行われたようです。マルコは今、パウロと共にローマにいます。そして、パウロが二回目にローマで牢に入れられていた時は、テモテに対して、「マルコを伴って、一緒に来てください。彼は私の務めのために役に立つからです。」と言っています(Ⅱテモテ 4:11)。これほどまで、パウロとマルコの仲は元通りになり、共に主のために働いています。こういうことも、働きの中でしばしば起こりますね。別れたはずの者たちが、今は、主にあって同労者になっているのです。主は、面白いことをしてくださる方です。

¹¹ ユストと呼ばれるイエスも、よろしくと言っています。割礼のある人では、この三人だけが神の国のために働く私の同労者です。彼らは私にとって慰めになりました。

イエスと言っても、ナザレから出たイエス、すなわち私たちの主キリストでは、もちろんありません。イエスは、ユダヤ人の中でよくある名前でした。

そして感慨深いのは、アリストアルコ、マルコ、そしてユストだけが、パウロと同じように、割礼のある人、つまりユダヤ人だということです。パウロは異邦人への使徒になりましたが、彼と同じようにユダヤ人で異邦人に対する働きをしている人々は本当に少なかったのです。けれども、この三人がいます。それで、彼は慰めを受けています。平和を造る人は幸いである、とありますが、ユダヤ人と異邦人がキリストにあって一つであるということこそが、奥義であり、福音の核心であります。その核心部分を体現しているか？という、これはまた別問題だったのです。ユダヤ人の働き人はユダヤ人に対して、異邦人は異邦人に対して、であったでしょう。しかし、パウロのようにユダヤ

人から異邦人に福音を持って行っている人は本当に少なかったのです。

実は、このように平和の福音を携えるということは、福音の中心部分なのに、実際にそれを行っていることは少ないのです。私たちがいかに、キリストのからだの欠けたところを満たせるのか？というチャレンジが与えられています。みんながやっていることを漠然と行うのではなく、主が架け橋になってほしいと願われているかどうか、尋ね求めて見ましょう。

3B アジアからの同労者 12-14

¹² あなたがたの仲間の一人、キリスト・イエスのしもべエパfrasが、あなたがたによろしくと言っています。彼はいつも、あなたがたが神のみこころのすべてを確信し、成熟した者として堅く立つことができるように、あなたがたのために祈りに励んでいます。

ユダヤ人の働き人ではなく、異邦人の同労者が三人、挨拶をしています。エパfras、そしてルカ、次にデマスです。

エパfrasですが、彼こそがコロサイの教会の監督です。1章7節で、「あなたがたは私たちの同労のしもべ、愛するエパfrasから福音を学びました。」とあります。彼が、コロサイの状況をパウロに伝えました。でもなぜ、彼が手紙を携えて、コロサイに戻らないのでしょうか？ピレモンへの手紙に書いてあります、「キリスト・イエスにあって私とともに囚人となっているエパfras(23節)」と。エパfrasは、ローマに来てから、福音のために捕えられて囚人となっていたのです。

そして、エパfrasの心は、牧会者の心でした。コロサイの人たちが、みこころを確信して、成熟した者として堅く立つ、つまり、これまでパウロが手紙の中で書いてきたことを、まさに願って、祈ってきた人でありました。

¹³ 私はエパfrasのために証言します。彼はあなたがたのため、またラオディキアとヒエラポリスにいる人々のため、たいへん苦勞しています。

エパfrasのように、たいへん苦勞している人々を認めなさいということを、パウロは言っています。私たちは、教会のため、福音のために労している人々、自分たちのために労している人々はよく知っています。けれども、逆に労しているために、仕えているので、私たちは当たり前と思って、ないがしろにしてしまいます。言葉のなめらかな人、目立つ人に対しては認めやすいですが、いつも忠実に仕えている人には、目を向けないことが多いですね。だから、敢えて書いているのです。

そして、コロサイにいたエパfrasは、コロサイの町だけでなく、ここに書かれているように、「ラオディキアとヒエラポリス」の人々のためにも仕えていました。この手紙を学ぶ時に説明しましたが、

コロサイとヒエラポリスとラオディキアは、リュコス川流域の三角地帯とも言うべき、隣接している町々です。ヒエラポリスには、温泉が出ます。コロサイは山から冷たい水が流れています。その間にあるのがライディキアです。それで、ラオディキアに水道管を伝ってやってくる時は、生ぬるいという話から、黙示録 3 章のラオディキアに対する、イエス様の言葉があるとされています。ちなみに、ここでのラオディキアは、黙示録でイエス様が語られていた時よりもずっと前の事、40 年ぐらいまえではないかと思われます。

¹⁴ 愛する医者のルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくとっています。

ここにルカが出てきます。彼は使徒の働きで、パウロたちが第二次宣教旅行をする時、マケドニアへ行こうとする時に同行した人ではないかとされています(使徒 16:11 参照)。そして、彼は医者です。ルカによる福音書や、彼の書き記した使徒の働きを見ると、人体について詳しい書き方をしている部分があります。ルカが、順序立てて書いた福音書と使徒の働きは、もしかしたら、これからパウロが皇帝の前に出ていく時に、パウロの弁明のために書き記した証言書だったのではないかとまで言われています。

そして「デマス」です。福音の同労者の中では、生々しい現実としてありますが、これだけ福音のために労していたのに、途中で信仰から離れてしまうということがあるのです。デマスは、パウロが二回目に牢に入れられた時に、パウロから離れてしまいました。「Ⅱテモ 4:10 デマスは今の世を愛し、私を見捨ててテサロニケに行ってしまいました。」とっています。これだけ、主に熱心だった人が、どうして?ということが起こりますね、実際に。

4B ライディキアへの手紙 15-17

次は、ラオディキアにいる人々に対する挨拶です。

¹⁵ どうか、ラオディキアの兄弟たちに、またニンパと彼女の家にある教会に、よろしく伝えてください。

ライディキアの町にニンパという女性の家で行われていた教会があったのでしょうか。今、ラオディキアに行きますと、つい最近、発掘された家の教会があります。邸宅なのですが、その中に礼拝できる部屋が造られています。今、ハウス・チャーチ運動というものがあります。新約時代は家の教会だったのだから、これこそが聖書的なのだというものです。いいえ、彼らは公に建物を建てることができなかつたので、家に集まっていたのです。その証拠に、ヤコブの手紙を見ますと、ユダヤ教の会堂で集まっている姿も見ることができます。家に集まるのが、ただ他の方法では集まれなかつたということ以外には、理由がありません。

¹⁶ この手紙があなたがたのところで読まれたら、ラオディキア人の教会でも読まれるようにしてくだ

さい。あなたがたも、ラオディキアから回って来る手紙を読んでください。

コロサイ人への手紙は、ライディキアの人々にも読んでもらいます。同じ問題があり、また同じ励ましが必要だったのでしょう。そして、パウロは、もっと前にラオディキアに対して手紙を書いていたようです。それが回覧で回ってきます。このようにして、ラオディキアはコロサイと一対で、教会が成り立っていました。

¹⁷ アルキポに、「主にあつて受けた務めを、注意してよく果たすように」と言ってください。

アルキポは、ピレモンへの手紙で、「私たちの戦友アルキポ」とありますが(2節)。彼はおそらく、エパfrasに代わって、コロサイの教会を監督していたと思われます。ですから、彼の働きは重大です。そこで、主から受けた務めを、注意して良く果たしなさいと命じています。コロサイにある、あらゆる異端の教えがありますから、よく注意して牧会の働きを果たして行かないといけません。これは、働きをする時に必要な姿勢です。主にあつて受けた務めがそれぞれにあります。それに対して、逸れることなく、注意して良く果たすようにします。

5B 手書きの挨拶 18

¹⁸ 私パウロが自分の手であいさつを記します。私が牢につながれていることを覚えていてください。どうか、恵みがあなたがたとともにありますように。

18節は、同じ日本語の印字ですが、原本は、ここからパウロの手書きになっているのです。それまでは口述筆記で他の人が書いていました。それもパウロの言葉なのですが、この手紙は正真正銘、パウロによるものだと確認するために手書きにしています。

そこで書きたかった言葉は、第一に牢につながれていることを覚えていてほしいということです。私たちは、主にある働き人が苦しみにある時に、覚えているべきですね。今、カルバリーチャペルの宣教師で、アフリカのモザンビークという国で牢に入れられている人がいます。ライアン・コーハー(Ryan Koher)という人です。彼のことを覚えて、祈って行きましょう。このように、切実な願い、祈りがあります。そして、第二に、恵みがあるようにという祈りです。これでコロサイ人への手紙をしめくくるのですが、恵みがあるようにという言葉は、しめくりにふさわしいでしょう。

これでコロサイ人への手紙を見ました。これまで私たちは、パウロの手紙を見て来て、ローマ、コリント、ガラテヤは、救いについて書いていました。エペソ、ピリピ、コロサイは、キリストのからだである教会を見ていました。次、テサロニケは、主が再び来られること、再臨についてです。